

海 山 のものとか

【連載・その二】

狩猟系ギョブの誕生

竹川 大介

海が好きだ。
名古屋で生まれ育った私は、夏になると伊勢の海によく連れて行ってもらった。そこは南島町という漁師町だった。学校の友人たちは知多半島のビーチに行くことが多かったようだが、南島町は岩場の磯だった。水中眼鏡を借りてルリスズメダイを追いかけた。陸にいるときよりもずっと近くに、生物を感じることができたのが楽しかった。

小学校3年生の時に敦賀の水島というところでキャンプをした。その頃はまだ敦賀原発などなかった。どこまでも透明で、青い海だった。その後の人生で、毎年のように太平洋の離島に通うようになり、よくこの時のことを思い出した。どんな美しい海も、あの記憶の海ほど美しくはなかった。
大学時代に探検部という所に入っ

た。海底10メートルの場所にテントを張り、スキューバのボンベで空気をおくり何日も海中生活する、そんな魅力的な計画を聞かされてダイビングを始めた。結局この無謀な計画は私たちの代には実現しなかったが、海にはよく通った。暖かくなると京都から夜中に車を飛ばし、南紀の海に潜りに行った。白浜の臨海実験場で研究をしていた探検部の先輩のレクチャーで、海にすむ不思議な生き物をいろいろ覚えた。

大学2年の夏に、はじめて沖縄に行き、透き通ったサンゴの海と魚影の濃さに圧倒された。石垣島から西表島の西の端の無人の浜までカヌーで渡り、テントを張って何日もすごした。海にいるのは楽しかった。浜で泊まるのも気持ちよかった。
カヌーで島を渡るにあたり、潮の



さらに海の楽しさを教えてくれたのは、太平洋の海洋民たちだった。沖縄の調査のあと、博士課程からは、ソロモン諸島やマレーシアの小さな島に住む人々の村に通った。毎日の食料を得るために海に行くという、シンプルで暮らしを知った。食べるために魚を獲り、獲った魚は必ず食べる、これが彼らから私が学んだ、人間が幸せに生きるための秘訣だった。

村の男たちは、1メートルほどの鉄筋の尻に、ゴムを引っかけ、それをパチンコのように飛ばすという、ごく単純な原理の銚子を使っていた。銚子を支えるのに両手が必要なので、足だけで潜らなくてはならなかった。鉄筋の銚子は下手に飛ばすと深海に沈んでいった。最初の頃は、全然当たらなかった。上手な人の後をつけて泳ぎ、その人の突いた魚を集めて回った。後ろから見ていると、名人がどこを探しているかよくわかった。魚種によって隠れている場所が違うことも覚えた。魚の動きも予測できるようになった。島の子供たちと同じように、私も大人たちを見ながら、海の技を盗んだ。

自分の銚子を持つだけで、私は海とひとつの契約を結んだような気持ちになった。魚が突けるようになると、海の見え方はまったく変わった。通い慣

れを教えてもらおうと、漁協を訪ねたら、そのあたりの海で毎日潜り、大型追込漁をしている海人集団のリーダーを紹介された。この時であった海人に、人生を変えられた。かれはグルクン大将と呼ばれていた。

その3年後、大学院に入学した私は、自分の研究の調査地をさがすために、とくにあてもなく石垣島に向かった。近隣の宮古島にも興味があったし、そのまま外国航路で台湾に行くことも考えていた。石垣島に着き、ちよつと挨拶をするつもりでグルクン大将を訪ねた。

「『研究』のために来ている」と言っ

たのに、大将の耳には「研修」のために来ている」と聞こえた。「何年間だ」と訊かれたので、修士課程の「2年間です」と答えたら、大将は「2年で一人前にできるかなあ」とつぶやいた。そのまま船に乗せられた。毎日海に出る港に戻るのが、「船で寝ろ」といわれ陸に上げてもらえなかった。後でわかったことだが、かつての糸満漁民の雇い子は、みなそうやって海を仕込まれたのだった。

私の主な仕事はボンベの受け渡しと網上げだった。漁の合間に若手の海人たちと素潜り競争をした。船の下を潜ると、魚探に自分の影が映った。



竹川 大介
(たけかわ だいすけ)
理学博士。専門は海洋民族学、人類進化論、人の環境適応。
1996年より北九州市立大学で人類学を教え、九州フィールドワーク研究会(野研)を主宰。

野研
九州フィールドワーク研究会
<http://www.apa-apa.net/~yaken/index.html>